
黒い神と呼ばれた人

山城 巳麓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒い神と呼ばれた人

【Nコード】

N36690

【作者名】

山城 巳麓

【あらすじ】

モスクワ郊外の小さな町で起こった悲劇を皮切りに、ニコライ・ゼレンコフとその娘イリーナは“聖戦”に巻き込まれていく。 ※ D・Graymanの2.5次創作です。原作より2年前くらいからは始まります。

第0夜 グッドバイ、日常（前書き）

初投稿なんで、変な箇所があっても気にしないで読んでください。
微グロ表現注意！

第0夜 グッドバイ、日常

心地よい眠気の波に浚われている。

「起きたら、また遊ぼうね。絶対だよ？」

――――

19世紀

ロシア、モスクワ郊外

10月某日

今日は娘が生まれる日だ。

いつもより早めに仕事を切り上げたニコライ・ゼレンコフは、急いで妻のレナータが入院している病院へ向かった。

（生まれてくる子は僕に似ているのかな？レナータに似ているのかな？どんな子に育つのかな？）

幸せに口元を緩めつつ、ニコライは走った。

病室。

無事に出産を終えた妻の体から、錆色の花が咲いていた。

傍らには異形。見知った看護婦の面の皮をぶら下げていた。

『イノセンス、めーっけ！』

やっぱ持ってたんだ、レナータさん』

ずるり。

異形はレナータの体から肥大した右手を引き抜いた。今度は赤い花が咲いた。

「あ、ああ…」

ニコライは生まれたばかりの娘を抱え、震えていた。

主治医も他の看護師も、自分たちを残して目の前の異形に殺されてしまったのだ。

『奥さん殺しちゃってごめんなさいねえニコライさん。お腹すいちやって、つい』

「な、何なんだお前は！」

『何だっていいじゃない』

面倒くさそうに異形が答えた。

『それより…ワタシ、まだお腹減ってるんですよね』

異形の左手がすぐ目の前に迫っていた…。

暗転。

第0夜 グッドバイ、日常（後書き）

一番初めなんでこんな感じです。

第1夜 僕とウサギとときどきパンダ

(体がだるい)

「逃げて、ニコライ…」

(…助けられなくてごめんな、レナータ)

『ダメだわ! やっぱり我慢できない』

(化け物め。娘を…イリーナを守らないと)

『悪く思わないでくださいね』

(僕に力があれば)

力なら有るだろう?

「うわああああっ!!」

ガンッ!

「いだっ!？」

激痛とともに目蓋の裏に星が散った。

何かとてつもなく固いものに頭をぶつけた様だ。

ふと気が付いた。隣には温かいもの——赤ん坊が寝息を立てていた。まどろんだ思考が一気に現実に取り戻される。

「イリーナ!! あいた!？」

目の前にやや不恰好な大き目の十字架がぶら下がっていた。

どうやらさっきからコレに頭をぶつけたらしい。

見慣れない部屋だが、どこかの宿だろうか？

「気が付いたか」

「わあ!」

奇抜な出で立ちの老人がベッドサイドから顔を覗かせていた。

勢い余って転落。良かった、イリーナは無事だ…。

安堵していると、今度は上下逆さまになった眼帯少年が現れた。

「おー。起きたんか…って、んなとこで転がって何してるさ?」

「助けてくれ! パンダの妖精が…じゃなくて! ここは何処であんた

ら誰!?!?

何なんだよもう意味わからんあーウォッカ飲みたい!」

パニックを起こす僕に釣られてイリーナがぐずりだしてしまった。

「なんと情けない」

「あーあ、泣いちゃったさ。ジジイが急に顔出すからさ」

取り乱したニコライはラビともどもブックマンに絞られ、今は床に正座して畏まっていた。

足が痺れてこようがお構いなしにアクマのことやイノセンスのこと、聖戦に係る事柄の説明を聞かされている。

「ブックマンとラビはエクソシストで、この町にイノセンスがあるって聞いたから探しにきた、と」

「そーさ。イノセンスはレナータが持っていた。病院を襲ったアクマはそれ目当てだったさ」

「…どうして、僕と娘は助かったんだろう?」

「それは…」

「お主が適合者だからだ。無意識のうちにイノセンスを発動させていたらしい」

ラビのセリフを引き継いでブックマンが言った（若干被せ気味だったのは気のせいだろうか）。

「ニコライ、俺らと一緒に教団に来てもらうさ」

拒否は認めない。ラビの目はそう言っていた。
妻を殺したアクマが憎い。

もとより拒否する気は無かったので、ニコライは頷いた。

「……………わかった。でも、条件がある」

第1夜 僕とウサギとときどきパンダ（後書き）

ラビとブックマン登場。 彼らの到着がもう少し早かったら……。とかは一切考えないヘタレなニコライさんでした。 十字架Ⅱ加工前のイノセンスです。

第2夜 ビッグ、ビガー、ビゲスト（前書き）

タイトルに意味は無いです。

第2夜 ビッグ、ビガー、ビゲスト

二週間後。

「さ、着いたさ——ようこそ、“黒の教団”本部へ」

圧倒されてしまう、その大きさに息を呑んだ。
ラビたちの話からある程度推測はしていたけれど、何なんだココ。

「∴クレムリンとタメ張れるぞ。なあ、イリーナ？」

「あぶ」

背中 of イリーナ（僕 of 天使）が返事を返した。
条件というのはイリーナも教団に連れて行くこと。

ブックマンにはとめられたけど、僕たち夫婦はお互いが身寄りの無い孤児だったため、イリーナを預かってくれるような親戚なんて居ないのだ。

妻の忘れ形見を孤児院に預けるのも気が引ける、と言うわけで提示したのがこの条件だ。

「まずは室長に会いに行くのが良いだろう」

「分かった」

シツチョウ：って響きからして偉い人なんだろうな。
おっかない奴だったら嫌だなあ…。

書類？がうず高く詰まれた机の前に、白い衣装に身を包んだ眼鏡の男が作業していた。手に持ったマグからは湯気が立っている。

「ようこそ！ニコライ・ゼレンコフだね？僕はコムイ・リー、室長だよ！
ラビとブックマンから聞いたよ」

「はあ…」

イメージと全ッ然違う。シツチョウは、恐怖の大魔王のごときおっさんなどではなく、ずっと若くて豪くテンションの高い奴だった。良かったーだの若いなーだの、そんなことを思いながらラビにイリーナを預けていると、コムイ室長が右手を差し出してきた。握手だ。とりあえず応じる。存外強い力だった。

「リナリーに手を出したら…容赦しないからね？」

ずい顔と顔を寄せて、室長はそんな事をのたまった。
この人目が笑っていないぞ！

「え？！は、はい…と言うかりナリーって誰——」

「何っ！？僕のきゃわいいリナリーを知らないだとう！！？」

「ぐおっ!!!?」

胸倉を掴まれて、これでもか!と言うほど揺さぶられた。
どうやら室長にとってリナリーという女の子(多分)は大切な存在
のようだ。

「落ち着くさコムイ!ニコは今着いたんだから
リナリーのこと知らなくて当然っしょ!?!」

ラビが(室長を殴って)助けてくれたけど、
ブックマンはそ知らぬ顔で廊下の奥に消えていった。
人事だと思ってジジイ!!

第2夜 ビッグ、ビガー、ビゲスト（後書き）

！ 教団本部に到着しました。コムイも登場。どこまでもシスコンだよ

第3夜 あらゆる点での相乗効果

さらに三日が経った。

鍛錬の合間合間に任務が入っていないマリやデイシャ達とイリーナをあやしていると、

リナリーから科学班フロアに来るように言われたので、イリーナを抱っこしてリナリーについて行った。イリーナも一緒に、このことだ。

で、研究室に着いたわけだが。

「うん、ぴったりだな」

「な、何か恥ずかしいな…」

うんうんと頷いているツンツン頭を筆頭に、科学班がやや恥ずかしそうに厚手の団服を着た新人エクソシスト（＝僕）を囲んでいる。ほぼモノトーンで構成された色合いに、アクセント程度の銀色。

僕の左胸には、大きなローズクロスが輝いていた。

リナリーに抱っこされたイリーナも、淡いココアとピンクのベビ服（犬耳付き）を着て楽しそうに笑っている。

「イリーナも良かったね」

「まうー」

「うふふ」

（（か、かわいい……！！！！））

相乗効果で……って言うか二人ともめっちゃ可愛いんですが（父性的な意味で）。心なしか、科学班の隈が薄れていつてるような。癒し効果抜群だ。科学班もスゲェ。何でも作っちゃうんだもんな……。

「あとニコライ、これもな。お前の対アクマ武器も出来たから忘れないうちに渡しとくよ」

「ん。ありがとうリーバー班長」

レナータからの形見とも言えるあのイノセンスは、歪な十字架から、赤い鎖と、所々に金の装飾が施された黒い色の八端十字架に変わっていた。十字架自体は一般のサイズよりも大きくて、剣か何かの柄のようにも思えた。試しに握ってみると、不思議なくらい手に馴染んだ。

「簡単に説明すると……いや、しなくても見れば分かるか。お前のイノセンスはこの形が一番しっくりきたんだ。強力な結界を展開できるようになってるが、どう使うかはニコライに任せる」

「了解」

じゃ、俺たちはこれで！と班長たちが作業に戻っていったのと入れ替わりに、黒髪のアジア人がやって来た。

目付きの悪いサムライだ。

「おい。コムイが呼んでるぜ」

「はいはい。伝言ごくろうさま、カンダちゃん」

「斬り殺すぞアル中」

「失礼な！そんなに飲んでないぞ、僕あ！」

「…イリーナの前では、だろ」

聞き飽きたとでも言うようにカンダちゃんは踵を返してどこかへ行ってしまった。

……後でリナリーから聞かされたのだけど、いつだったかに僕がヴォートカを嗜んでいる時、“とても楽しそうに”カンダちゃんと戯れていたそうなの。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3669o/>

黒い神と呼ばれた人

2011年10月7日21時20分発行